

読書記録シート

読書番号 9 氏名 有田 志子

記入年月日 2003 年 6 月 15 日

題目(書名・論文名) 教科理解の認知心理学

著者 鈴木宏昭、鈴木高士、村山功、杉本卓

出版社 新曜社 出版年 1989 5/28 ページ数 第2章, p85

書籍のありか 研究室、及び図書館

関連する箇所の内容

アナロジーとは、既有の領域の知識を用いて、未知の領域の事柄を理解すること。

また、2つの領域の知識を関連付けるといった心的操作のことである。こうしたことは

実は人間の“学習”の基本的な様式である。

我々がコンピュータと異なるところは、単に手続きかがプログラム化されればそれを用いて自動的に処理を行うメカニズムを持ち合わせていないことである。

我々には、既有の知識と新たに学習したこととを関連付けることが必須である。

我々は、手続きをどうして実行しなければならないのか、Bという手続きはどうしてAの後にこななくてはならないのか、手続きを実行するとどういったことが起こるのかということが自分の前もって持っている知識と関連付けなければ、学習はうまく進まないし

仮に学習できたとしても、うまく使いこなすことができない。(佐伯・鈴木、1987)

自分の意見

やっぱり、今までの学習、授業の問題点で、特に数学においては、なぜ、この手続きを使うのかといった視点が欠けていた。手続きだけ見れば、学習者は説ける。

しかし、問題は、どういうときに、なぜ、この手続きを使うのかといったことが理解されていないから、問題は難しくなる。それでは、もし学習者が手続きにおいてなぜを知っていなければ使えないのならば、私のやろうとしている道具によって行為をデザインすることは意味がなくなる。Greene 先生の手続きだけを記述して困ったときに使用するというタイプの本もおかしくなる。